36 矢野正子
大学体験からの展望
—大学における看護教育：現状と課題
看護技術 1976年4月号 115-117 1976

●大学看護教育のあり方を聞く

大学体験からの展望

矢野 正子
<東京都立府中病院・婦長>

私の大学体験から

私の大学体験からまず話をすすめてみたい．私は，今の東大保健学科のいわば前身——衛生看護学科で学んだが，まだその初期のころは，臨床を重視している部分があって，そういった場でスーパーバイズする人間を育てるという目的をうたっていたように思う．しかし，現実には，卒業生は，教育畑にいくとか，保健管理，産業衛生，精神衛生——といった方面に出ていっており，方針としても本当にあったのかどうか．

それは，個々の学生の意向に最終的には負っていたわけであるが，どうも今振り返ってみても，臨床の看護をやっていける人間として育てていた，それが強調されていたとはいえなかった．

一学生として当時を振り返ってみたとき，教育の実質的な内容について考えてみると，私の印象に強く残っていることは，例のV．ヘンダーソンの考え方が唯一のものであった．いわば，昭和35，6年の頃は，日本の看護界が，そうした思想というか，そのような考え方に倣っていった時代ともいえよう．

V．ヘンダーソンの考え方というものがいずれにせよ強く印象に残っている．それは，今までの経験の中では，思いもよらなかった一つの考え方であり，またWHOの健康の定義である社会的，心理的，身体的——といった側面から患者をトータルに捉えようとするものであり，その意味では日本の看護にとって刺激的なものではあった．しかし，草創期の当時の教育の中では，果たして，看護教育として，それ以上のものがあったかというと疑問である．

ひるがえって，アメリカの看護から当時とってくることができたものはどれほどあったかというと，今文献であたってみても，それ以外にも，たくさんあったのだろう．たとえば，看護の研究に関する事柄，看護の役割（extended role）と

か，看護教育に関する事柄，その他あらゆる領域で，文献としてあった筈であるにも拘らず，ほとんど専門の課程でも我々に紹介されはしなかった．

そういう意味で，はたして教育する任にあたっていた人たちの考え方なり材料なりの中に，大学教育としての，また看護者教育としての捉え方が十分なされていたかどうか疑問である．

また，公衆衛生のコースと看護のコースとの間に交流のなかったことも今思えば奇異な感じもする．

しかし，いわば草創期としての段階であり，方針としても確固たるものを打ち出せなかったという悩みもあったのであろう．

その後私は臨床へ出た．その動機というものは，大学の同僚が臨床を敬遠し，臨床看護婦の交替勤務，夜勤への拒否的なイメージが強く，私自身もそうした雰囲気に馴じみ，自分も当然，“看護婦になるために”大学に来たのではないと考えるようになっていた．そして将来健康管理者として歩もうと思っており，そのための一つの前提としての自分の看護の“技術”的な弱さ——それを克服するために臨床を身につけようとした，というものにすぎない．

しかし，臨床は，私にとって，絶望をくりかえした場であり，病院争議を背景にして，クルクル振り回され，そのうち私は療養所に入る身になった．そして療養所生活を終えて，母校である東大の基礎看護学講座のメンバーとして復職することになった．そして今度は，教える立場になったわけである．教えるといっても，それほど十分にできる立場になかったし，技術的なこと，臨床の手伝いぐらいしかしなかったが，今にして思うことは，東大では，臨床をカバーすることがほとんどできなかったということがいえる．

看護学講座というものが，基礎だけをやるということになっていて，臨床をやる人があまりいなかったといえるのかもしれない．とはいうものの，やたらに時間をかけてやる実習というものに対する批判から，短時間で集中して効率的な実習を心がけたり，実習のイニシアティブは教育の方が組みたてにしても何にしても持っていた，という意味では，質的に高いものが目的を明確にしてあったということはいえるかもしれないし，ある意味では新しい試みを取り入れたともいえる．

また，東大の場合は方向づけが現在変わってきて，コースが選択になっているから，その点，一概に言えるかどうかはわからない．

大学の方向づけ

また，一般教育に関していえば，やはり大学のそれは，すてがたい魅力があったし，強いていえば，そこの部分が大学の一つの主要な部分であると考える．私の場合，教養部で1年半の課程を過ごしたが，その専門の前段階としての期間は，大変貴重なものであったと考えている．その期間，医学系に進む者は，たとえば

心理学，統計学，社会学はクラスで行ない，それ以外のものは，一般の学生と同じところで受講した．また，一般教養の中で，決められたもの以外の選択ができたし，そんな意味でも総合大学には大きなメリットがあったと思う．またとくに英語やその他の外国語の学習の徹底が可能であるという——そこの魅力もすてがたい．

また，専門にすすんでも，他学部との交流やら，学術的雰囲気が常にあるし，卒業後も，研究テーマによってはそこをフルに使うこともできるし，そうした事柄は現実では大学ならでは，ともいえるであろう．

今後の教育の方向づけとして考えることは，たとえば大学が，一般の看護学校の卒後のコースとして道を開いていくことも重要ではないか．学生が卒業してから後のシステム化されたコースがほとんどなく——教員になるコースがいくつかはあっても——，学習意欲も中途で失っていくという実態も指摘されているし，そういう彼女らに，門戸を開いていく役割を担っていく必要性を感ずる．それには，それなりの準備やら，行政的な準備が必要になっていくだろうが……．

それと，日本の場合とアメリカの場合とを比較してみると，端的に，大学や短大の教員資格の基準が，看護の場合は非常に甘いことがいえる．過渡期といいながら，それが相当期間続いているが，教員の資格認定は今後も問題にされていくのではないだろうか．

総括的にいえば，今私は臨床看護者として婦長という立場にいるが，そういう立場から言わせてもらうと，臨床看護の体系化，明確化を大学ではやって欲しいし，それから看護者の資質を上げていく上において，大学化は決して否定すべき事柄ではないし，それだけ私などの期待もきわめて大きいということである．しかし，看護のマンパワーに対する施策やら，マンパワーが安価なものだという一般の見方が厳然としてある中で，大学の看護教育問題を考えていったとき，それはた易い道のりではないであろう．

<談—文責・編集室>